

市之郷遺跡第17次発掘調査報告書

2018

姫路市教育委員会

序

姫路市内には、約 1,200 か所を数える遺跡が所在しております。本市ではこれらを貴重な歴史遺産として後世に伝えていくため埋蔵文化財の発掘調査、整理、研究や展示などの公開事業を実施し、その保存と継承に努めております。このたび発掘調査を実施しました市之郷町三丁目の周辺は、弥生時代から中世にかけての市之郷遺跡をはじめ、市之郷廃寺などの主要遺跡が所在し、播磨地域の歴史を語る上で欠かすことのできない地域です。また、近年では JR 山陽本線の鉄道高架事業、阿保地区区画整理事業、キャスティ 21 などの周辺の再整備事業に伴い発掘調査が実施され、遺跡の実態が明らかとなってきました。今回の調査成果も、地域の歴史解明の一助になることと存じます。

最後に、事業実施にあたり多大なご協力を賜りました関係者各位に心から御礼申し上げます。

平成 30 年（2018 年）3 月
姫路市教育委員会
教育長 中杉隆夫

—例言—

1. 本書は、兵庫県姫路市市之郷町三丁目 49 番 2 に所在する市之郷遺跡（遺跡番号：020462）の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査（調査番号：20160486）は、事業者からの委託を受け、姫路市が実施した。
現地調査及び報告書の編集は、姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが担当した。
3. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準とした。
4. 土層名は、農林水産省農林水産技術会事務局・『新版標準土色帳』（1999 年度版）に準拠した。
5. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとにつけた。各遺構種は以下のように呼称した。
ピット→SP 土坑→SK 溝→SD 竪穴建物跡→SI 掘立柱建物跡→SB 不明遺構→SX
6. 本報告に関わる遺物・写真・図面等は姫路市埋蔵文化財センターに保管している。

一調査・整理の体制一

姫路市教育委員会

教育長 中杉隆夫
 教育次長 八木 優（平成 28 年度）
 名村哲哉（平成 29 年度）

生涯学習部

部長 植原正則（平成 28 年度）
 岡田俊勝（平成 29 年度）

文化財課

課長 花幡和宏
 課長補佐 大谷輝彦

埋蔵文化財センター

館長 前田 光則
 課長補佐 岡崎 政俊
 係長 森 恒裕
 技術主任 小柴 治子、中川 猛、
 福井 優、南 憲和、関 梓
 技師 黒田 祐介
 技術員 山下 大輝（平成 29 年度、
 平成 29 年 10 月 1 日～技師補）
 主事 小林 啓佑（平成 28 年度）
 岡本 武平（平成 29 年度）
 嘱託職員 韋 美紗（平成 29 年度）、香山 玲子
 （平成 28 年度）、田中 章子、玉越綾子、
 野村 知子、三輪 悠代、黒岩 紀子、
 清水 聖子、松田 聡子
 整理補助員 鈴木 千枝美（平成 29 年度）、宅見 春美、
 寺本 祐子、藤村 由紀、長谷川 鈴代
 （平成 29 年度）、荒木 聖奈子（平成 28 年度）
 臨時職員 秋枝 芳（平成 28 年度）

一目次一

序 例言 調査・整理の体制 目次

第 I 章 調査に至る経緯と調査地の位置

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査地の位置と周辺の遺跡	1
3. 既往調査	1

第 II 章 調査の成果

1. 調査区の基本層序	2
2. 弥生時代	2
3. 古墳時代	2
4. 平安時代後半～鎌倉時代	2

第 III 章 総括 3

一図版目次一

図版 1 / 図 1 調査の位置と周辺の遺跡	図版 11 / 図 14 出土遺物実測図 2
図版 2 / 図 2 市之郷遺跡の既往調査区位置	表 2 出土遺物観察表
図版 3 / 図 3 調査区断面図	図版 12 / 写真 1 調査区全景
図版 4 / 図 4 調査区平面図	図版 13 / 写真 2 SD1, 2, 4
図版 5 / 図 5 SD4 詳細図	写真 3 SD4 遺物出土状況
図版 6 / 図 6 SI1 詳細図	写真 4 SD4b-b' 断面
図版 7 / 図 7 SK1 詳細図 図 8 SK2 詳細図	写真 5 SD4c-c' 断面付近
図版 8 / 図 9 SK4 詳細図	写真 6 SD4d-d' 断面付近
図版 9 / 図 10 SB1 詳細図	図版 14 / 写真 7 SB1, 2, 3 写真 8 SK1
図版 10 / 図 11 SB2 詳細図	写真 9 SK4 写真 10 SK2
図版 11 / 図 12 柱列 1	写真 11 SK2 断面
図版 12 / 図 13 出土遺物実測図 1	図版 15 / 写真 12 出土遺物 1
表 1 出土遺物観察表	図版 16 / 写真 13 出土遺物 2

第 I 章 調査に至る経緯と調査地の位置

1. 調査に至る経緯

姫路市市之郷町三丁目において、集合住宅建設工事が計画された（図 1）。当該地は市之郷遺跡（県遺跡番号 020462）の範囲内に位置している。また、兵庫県教育委員会が実施したものづくり大学校建設に伴う調査箇所（北側）あたり、県営姫路日出住宅の建設に伴う調査箇所（西側）に近接する区画である（図 2）。平成 28 年（2016 年）11 月 15 日に 2×2m の試掘坪を 3 箇所設定し、確認調査（調査番号：20160366）を実施した結果、遺構が良好に保存されていることが判明した。このことから、工事範囲 406 m²を対象とし、本発掘調査を実施することとなった（図 2）。調査期間は、平成 29 年 2 月 1 日から平成 29 年 4 月 17 日で、市之郷遺跡において姫路市が実施した発掘調査としては第 17 次調査にあたる（調査番号：20160486）。

2. 調査地の位置と周辺の遺跡

市之郷遺跡は、弥生時代から中世にかけて営まれた集落遺跡である。包蔵地の範囲は、JR 東姫路駅周辺の姫路市日出町、市之郷、市之郷町、阿保にまたがる東西約 1km、南北約 350m を測り、遺跡の東端は現在の市川西岸に達する。（図 1）。遺跡の中央付近に 7 世紀半ばの創建とされる市之郷廃寺（県遺跡番号：020463）がある。当該地周辺は、姫路駅周辺の山陽本線等連続立体交差事業等によって発生した用地を活用した都市計画「キャスティ 21 計画」のサブエリア（生活利便ゾーン、健康福祉・住宅ゾーン）に該当するほか、姫路駅周辺土地区画整理事業対象地にも該当しており、兵庫県警姫路警察署やものづくり大学校、すこやかセンターなどの施設、基幹道路大日線などの道路整備が進められてきた。これらの再開発事業に伴い遺跡の本格的な調査が開始されたことから、当初の遺跡名は「仮称 姫路駅周辺第 3 地点遺跡」であったが、平成 22 年（2010 年）5 月 26 日をもって「市之郷遺跡」に変更された。なお遺跡名にもなっている「市之郷」という地名は、『枕草子』『山家集』等に登場する「飾磨市」に由来するという説が提唱されている。

周辺には南に隣接して阿保遺跡第 1 地点・第 2 地点が所在し、前者からは初期須恵器や韓式系土器がみつかり、近年には縄文土器も出土した。後者では弥生時代の竪穴建物跡や中世の掘立柱建物跡、木棺墓が確認され、蹄脚硯や石帯等の奈良時代から平安時代の官衙に関連するとみられる遺物も出土している。約 1km 西方には播磨国府推定地である本町遺跡やその関連施設跡とされる豆腐町遺跡が所在する。市川東岸には市内最大の前方後円墳である国指定史跡壇場山古墳や豊富な渡来系副葬品が国指定重要文化財となっている宮山古墳をはじめ、古墳時代を通じて多くの古墳が築造されている。

3. 既往調査

市之郷遺跡では、昭和 16 年（1941 年）に行われた姫路貨物駅操車場拡張工事によって多くの弥生土器が出土した。その際、遺物の採集がなされており、今里幾次氏によって報告されている（参考文献（1））。昭和 45 年（1970 年）には、山陽新幹線建設に伴う事前調査が鎌木義昌氏の担当で実施され、弥生時代中期の竪穴建物跡や奈良時代の掘立柱建物跡が検出された（参考文献（2））。平成 6 年以降は、前述の再開発事業及び民間開発事業に伴い、姫路市教育委員会及び兵庫県教育委員会による調査が継続的に実施されてきた。姫路市では、平成 29 年度までに 18 次、兵庫県では、平成 7 年以降 5 次にわたる本発掘調査がおこなわれている。これらの調査により、弥生時代中期の竪穴建物跡、円形周溝墓、

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴建物跡、土坑、古墳時代の竪穴建物跡、古墳時代から奈良時代にかけての掘立柱建物跡、平安時代以降の掘立柱建物跡などが確認されており、市之郷遺跡が、弥生時代中期から中世にいたるまで継続して営まれた集落遺跡であることが判明している。

第Ⅱ章 調査の成果

1. 調査区の基本層序

現地表面から盛土、旧耕土、床土を経た約1m下層で、地山である黄灰色細砂層（一部黄灰色砂礫層）を確認した。検出レベルはT.P. 11.9m前後である。

検出した遺構は、弥生時代の溝3条、古墳時代の竪穴建物跡1棟、中世の溝1条、土坑3基、掘立柱建物跡2棟、柱穴180基である。以下、時代ごとに主要遺構の詳細を述べる。

2. 弥生時代

調査区西部および南部で溝3条（SD1、2、4）と、溝に切られる遺物を包含した自然堆積層（SX3）を確認した。

SX3 調査地南西部で確認した（図4）。検出範囲は、東西約19.8m、南北5.8mで、南側は調査区外に延びる。出土遺物から弥生時代中期（Ⅲ）の時期が当てられる。埋土はおおむね2層に分かれ、上層は粗砂が多く混じる。下層も砂質が強く、埋土が広範囲になだらかに広がっていることから、自然堆積層と推測される。

SD1 調査地北西部で検出した（図4、5）。幅0.4～0.7m、深さ0.15m、検出延長8.4mを測る。北は調査区外に続き、南はSD2に切れられ削平されているため、全体の規模は不明である。出土遺物と遺構の切り合いから、時期は弥生時代中期（Ⅳ）である。

SD2 調査区を北西から南東に横断する溝である（図4、5）。幅1.2m～2.0m、深さ0.3m～0.5mを測る。弥生時代中期（Ⅳ）の遺構である。

SD4 調査地北西部で検出した（図4、5）。北から南流し、西に大きく湾曲して調査区外に続く。幅1.2m、湾曲部で最大幅3.2m、深さ0.4～0.6m、検出延長約17.0mを測る。SD1、2に切れられ、西端は削平されている。湾曲部より北側で遺物が多く出土した。時期は、弥生時代中期（Ⅳ）である。

3. 古墳時代

調査区南部で竪穴建物跡1棟（SI1）を検出した。

SI1 平面形は方形を呈するが、南西辺の一部にあたる2.0m×4.0mの範囲を検出したのみで大部分は攪乱を受けていたことから、全体の規模は不明である。深さは0.25mを測るが、下層は貼床の可能性はある。壁際には幅0.3～0.5mの周溝を検出したほか、南隅において直径0.5mの範囲で拳大の円礫の集石を確認した。遺構から出土した高杯の破片などから古墳時代初頭の時期が推測される。

4. 平安時代後半～鎌倉時代

土坑3基、溝1条、掘立柱建物跡3棟、および柱穴180基余りを確認した。

SK1 調査地南西部で検出した。削平が激しく明確なプランが不明であるが、東西約1.5m、南北約1.0mの範囲で、底面全体に薄い炭層と焼土塊を確認した。深さは0.1m前後である。出土遺物から、鎌倉時代頃の時期が当てられる。

SK2 調査地中央南端付近で検出した。検出部の規模は、東西 1.5m、南北 1m、深さ 0.15mを測り、南側が調査区外に続く。円形を志向するプランで、SD3 の下層から検出した。出土遺物から平安時代後半の遺構であると推察される。

SK4 調査地南西部で検出した。不整形ではあるが円形を志向するプランである。南北 2.8m、東西 3.1m以上、深さ 0.1mを測る。出土遺物が細片のため、詳細な時期は不明であるが、遺構を切る柱穴の出土遺物から、平安時代末から鎌倉時代初頭以前の時期が推測できる。

SD3 調査地中央付近を南北に縦断する溝である。幅約 0.7mであるが、南端では大きく広がり、最大幅 5.8mを測る。深さは、0.1m前後である。遺物がほとんど出土しなかったことから詳細は不明であるが、SB1 を構成する柱穴に切られ、SK2 を切ることから、おおよそ平安時代後半～鎌倉時代初頭の遺構であると推察される。

SB1 調査地の中央付近で検出した。建物を構成する柱穴は、SP60, 72, 73, 76, 88, 89, 77, 168 である。柱穴掘方の形状と規模は、直径 0.3～0.4mの円形で、柱根の径は 0.15～0.2mである。柱穴の一部が調査区外であるため不確定な部分はあるものの、建物平面の規模は、東西 4m、南北 8.2mの側柱建物である。柱間は、東西 2 間 × 南北 4 間、主軸は、N-18° -E である。SP73 から出土した須恵器椀から、平安時代末～鎌倉時代初頭の時期があてられる。

SB2 SB1 の東側に位置する。建物を構成する柱穴は、SP112～121 である。柱穴掘方の形状と規模は、直径 0.3mの円形で、柱根の径は 0.15～0.2mである。東西ともに柱の想定位置が調査区外であるため全容は不明であるが、東西 2.1m以上、南北 8.6mの総柱建物が想定できる。柱間は、東西 1 間以上 × 南北 4 間で、主軸は、N-17° -E である。出土遺物が細片であることから詳細は不明であるが、主軸方向が近似することなどから SB1 と同様の時期の遺構であると推測される。

SB3 SB1 の東側に位置する。建物を構成する柱穴は、SP147～153, 156, 159 である。柱穴掘方の形状と規模は、直径 0.3mの円形で、柱根の径は 0.15～0.2mである。東西ともに柱の想定位置が調査区外であるため全容は不明であるが、対応する柱列が全く確認できないことから、塀、もしくは柵列の可能性も考えられる。東西 1.8m以上、南北 11.4m以上である。柱間は、東西 1 間以上 × 南北 6 間以上で、主軸は、N-18° -E である。柱穴から出土した遺物が細片であるため、検討の余地があるものの、SB1 と同じ主軸方向をとることから、SB3 についても、SB1 と同じく平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構である可能性が高いと判断する。

第三章 総括

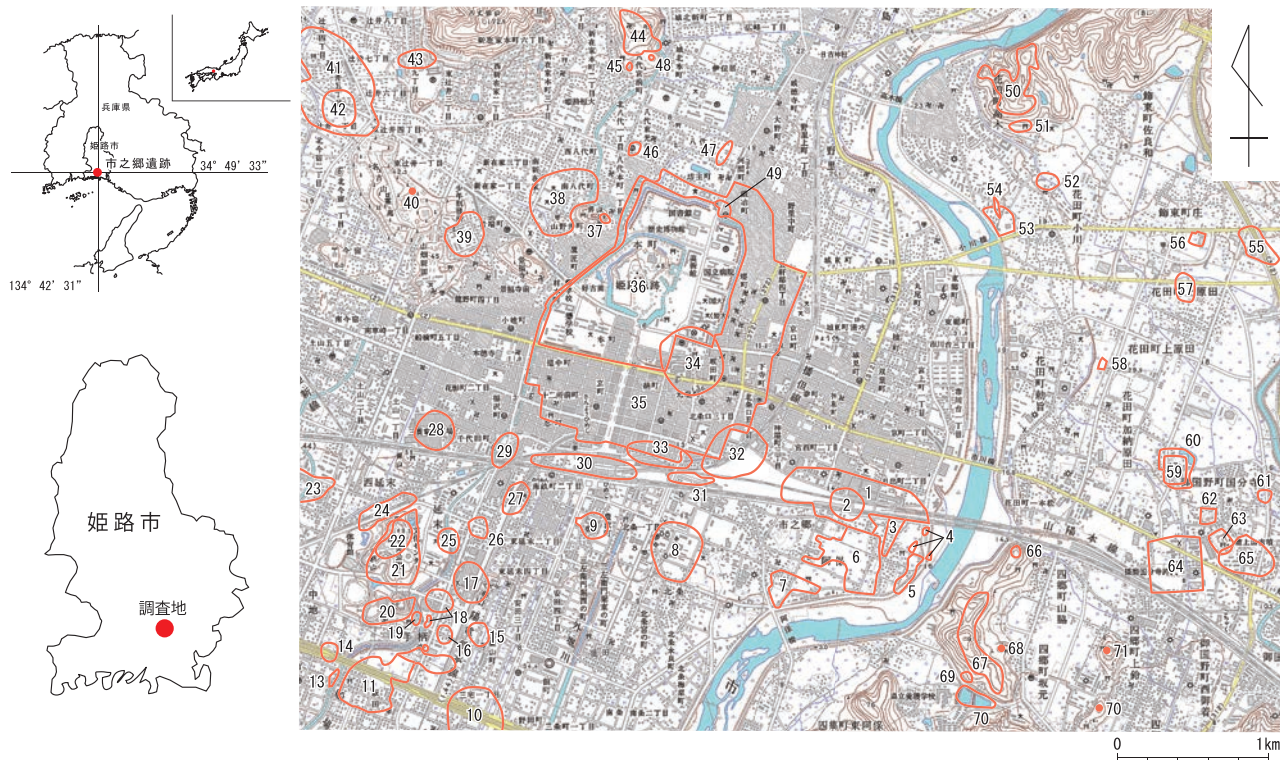
今回の調査では、弥生時代中期の溝、および古墳時代初頭とみられる竪穴建物跡及び平安時代後期～鎌倉時代初頭の掘立柱建物及び土坑を確認し、市之郷遺跡の広がりについて、新たな知見を得ることができた。このほか、調査区北壁沿いの断断面を観察すると、当該地における遺構検出面を構成する土層の下部では無遺物層ながら、溝状の断面プランを確認した。その下層にも砂質の強い土層が堆積していることから、調査地全体が旧河道の範囲内にあたり、比較的不安定な土地であることが判明した。遺構の分布傾向も、東に向かって密度が薄くなり、東端では皆無となっており、調査地の東側の区画で実施した確認調査において、遺跡を南北に縦断する旧河道を確認した既往調査成果を追認する結果となった。

〈引用・参考文献〉

- (1) 今里幾次「播磨市之郷弥生式遺蹟の研究」『古代文化』14-9 1962 日本古代文化学会
(今里幾次 1980『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会に再録)
- (2) 鎌木義昌「市之郷遺跡発掘調査概報」『姫路市埋蔵文化財調査報告書』1971 姫路市埋蔵文化財調査団
- (3) 鎌谷木三次「市之郷廢寺」『播磨上代寺院址の研究』1942 成武堂
- (4) 多賀茂治「玉津田中遺跡の竪穴住居について」『玉津田中遺跡第6分冊』1996 兵庫県教育委員会
- (5) 長友朋子・田中元浩「西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年—播磨編一』
(大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第5号) 2007 大手前大学史学研究所
- (6) 『市之郷遺跡Ⅰ』(兵庫県文化財調査報告第286冊) 2005 兵庫県教育委員会
- (7) 『市之郷遺跡Ⅱ』(兵庫県文化財調査報告第372冊) 2010 兵庫県教育委員会
- (8) 『市之郷遺跡Ⅲ』(兵庫県文化財調査報告第406冊) 2011 兵庫県教育委員会
- (9) 『市之郷遺跡Ⅳ』(兵庫県文化財調査報告第433冊) 2012 兵庫県教育委員会
- (10) 『市之郷遺跡Ⅴ』(兵庫県文化財調査報告第454冊) 2014 兵庫県教育委員会
- (11) 「(仮称) 姫路駅周辺第3地点遺跡(第2次調査)」『TSUBOHORI 平成9年度(1997)』
(姫路市埋蔵文化財調査略報) 1999 姫路市教育委員会
- (12) 「(仮称) 姫路駅周辺第3地点遺跡(すこやかセンター建設に伴う)」『TSUBOHORI 平成13年度(2001)』
(姫路市埋蔵文化財調査略報) 2003 姫路市教育委員会
- (13) 「(仮称) 姫路駅周辺第3地点遺跡 キャスティ21住宅建設予定地」『TSUBOHORI 平成12年度(2000)』
(姫路市埋蔵文化財調査略報) 2002 姫路市教育委員会
- (14) 『姫路市史』第2巻 1970 姫路市役所
- (15) 『姫路市史』第7巻下(資料編考古) 2010 姫路市

※ 土器の器種分類および時期区分については、弥生時代～古墳時代初頭は(5)に準拠した

※ 竪穴建物跡の内部構造の名称及び定義は(4)に準拠した



- | | | | | | |
|--------------|-------------------------|--------------|--------------------|----------------|-------------|
| 1 市之郷遺跡 | 14 長越遺跡 | 25 橋詰遺跡 | 38 八代深田遺跡 | 50 石積山城跡 | 63 壇場山古墳 |
| 2 市之郷廃寺 | 15 古屋敷遺跡 | 26 村淵遺跡 | 39 岩端町遺跡 | 51 石積山1・2号墳 | 64 播磨国分寺跡 |
| 3 阿保橋跡 | 16 浜田遺跡 | 27 君田遺跡 | 40 名古山遺跡 | 52 小川廃寺 | 65 国分寺台地遺跡 |
| 4 市之郷長堤遺跡 | 17 黒表遺跡 | 28 千代田遺跡 | 41 辻井遺跡 | 53 長谷遺跡 | 66 八重鉾山構跡 |
| 5 阿保下長・永河原遺跡 | 18 小山遺跡 | 29 南畝町遺跡 | 42 辻井廃寺 | 54 高木遺跡 | 67 坂元山1～9号墳 |
| 6 阿保遺跡第2地点 | 19 生矢神社裏遺跡 | 30 豆腐町遺跡 | 43 山崎山1～7号墳 | 55 上原遺跡 | 68 宮山古墳 |
| 7 阿保遺跡第1地点 | 20 手柄山南丘遺跡・
群集墳1～4号墳 | 31 朝日町遺跡 | 44 八代山古墳群
1～6号墳 | 56 宮ノ浦遺跡 | 69 坂元山南麓遺跡 |
| 8 北条遺跡 | 21 手柄山北丘群集墳
1～12号墳 | 32 神屋町遺跡 | 45 大蔵神社前遺跡 | 57 上原田廃寺 | 70 坂元山遺跡 |
| 9 豊次遺跡 | 22 手柄山北丘遺跡 | 33 駅前町遺跡 | 46 御茶屋町遺跡 | 58 小幡方遺跡 | 71 上鈴山古墳 |
| 10 三宅遺跡 | 23 八反長遺跡 | 34 本町遺跡 | 47 富士才遺跡 | 59 播磨国分尼寺跡 | 72 中鈴山古墳 |
| 11 畑田遺跡 | 24 山崎遺跡 | 35 姫路城城下町跡 | 48 東光寺山古墳 | 60 播磨国分尼寺周辺遺跡 | |
| 12 竹の前遺跡 | | 36 特別史跡 姫路城跡 | 49 野里門下層遺跡 | 61 国分寺構跡 | |
| 13 湯田遺跡 | | 37 東山焼窯跡 | | 62 山之越古墳(第3古墳) | |

図1 調査の位置と周辺の遺跡 (S=1:50,000)

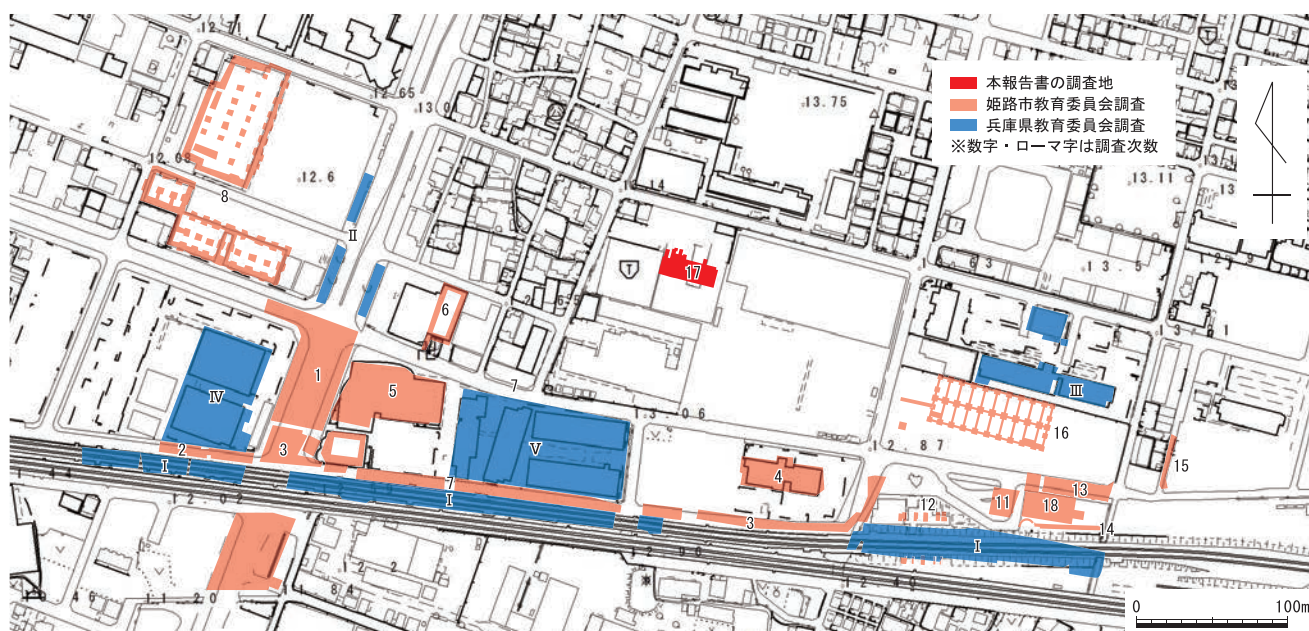
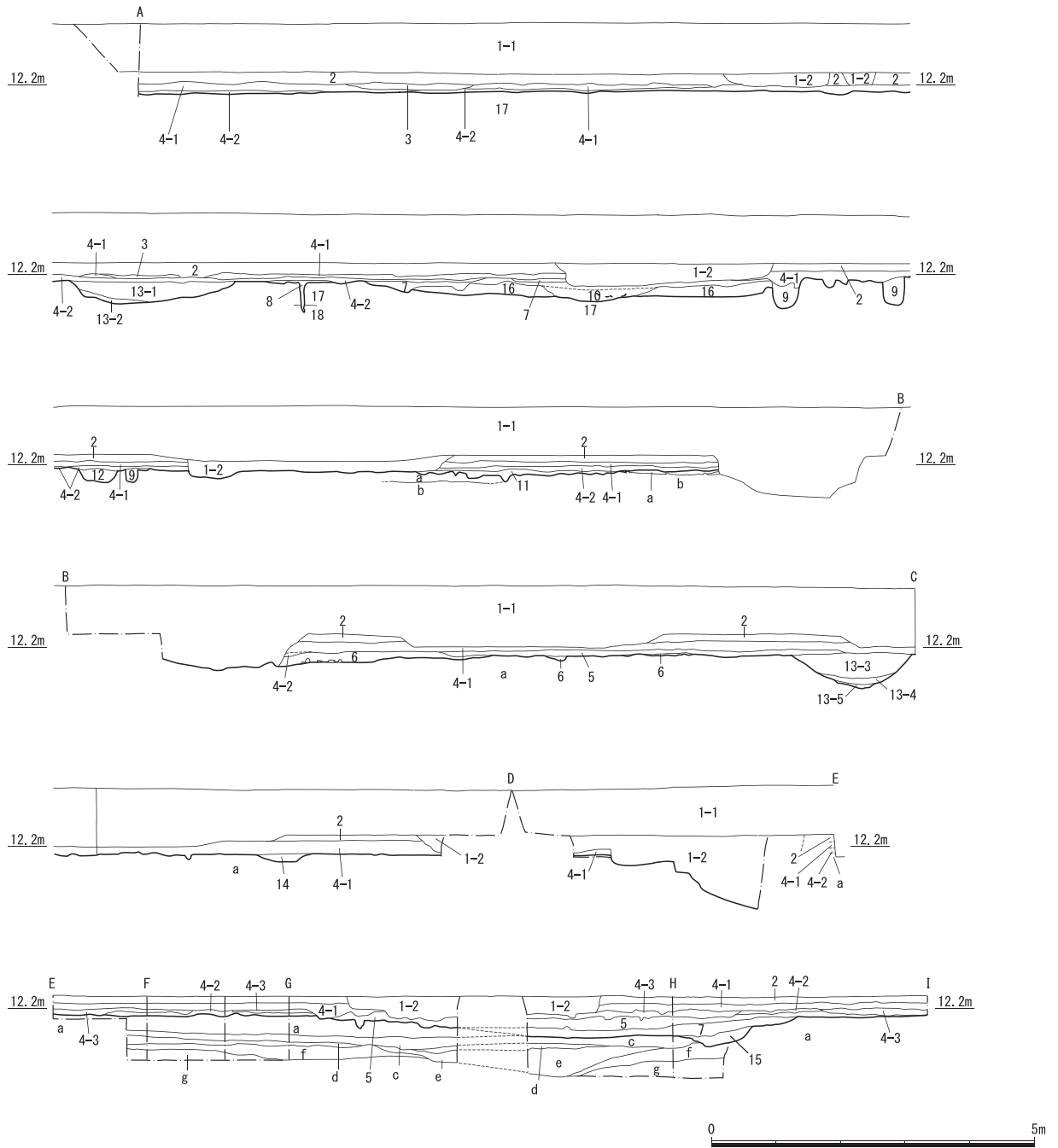


図2 市之郷遺跡の既往調査区位置図 (S=1:5,000)

図版 2



- | | |
|------------------------------------|----------------------------------|
| 1-1. 盛土 | 13-1. SD2 10YR4/3 ~ 5/3 砂混じりシルト |
| 1-2. 攪乱土 | 13-2. SD2 10YR4/1 ~ 5/1 砂、粗砂 |
| 2. 耕土 2.5Y4/2 | 13-3. SD2 10YR4/3 ~ 5/3 砂混じりシルト |
| 3. 5Y5/2 ~ 4/1 砂混じりシルト | 13-4. SD2 10YR4/2 ~ 5/2 粘土 |
| 4-1. 2.5Y6/1 ~ 6/2 砂混じりシルト | 13-5. SD2 10YR4/2 ~ 5/2 粘土 |
| 4-2. 2.5Y6/8 砂混じりシルト | 13-4 層との間に粗砂を挟む ※SD4 埋土の可能性あり |
| 4-3. 2.5Y6/1 砂混じりシルト | 14. SD1 10YR4/1 ~ 4/2 粗砂、砂混じりシルト |
| 5. 10YR4/1 ~ 5/1 シルト | 15. SD4 10YR5/1 ~ 4/1 粗砂 |
| 6. 10YR4/1 砂混じりシルト | 16. SX3 10YR4/1 ~ 5/3 粗砂混じりシルト |
| 7. 2.5Y5/2 ~ 5/5 砂混じりシルト | a. 基盤層 2.5Y5/3 砂少量混じり粘土～シルト |
| 8. SD3 10YR4/1 ~ 4/2 粗砂混じりシルト質細砂 | b. 基盤層 2.5Y5/3 砂礫 |
| 9. SP 10YR4/1 ~ 5/1 粗砂、シルト多量混じり細砂 | c. 基盤層 10YR5/3 砂混じり粘土 |
| 10. SK2 10YR4/1 粗砂、砂、シルト多量混じり細砂～中砂 | d. 基盤層 2.5Y6/3 砂 |
| 11. SK1 10YR5/2 シルト混じり細砂～中砂 | e. 基盤層 10YR5/2 ~ 2.5Y5/2 砂混じりシルト |
| 12. S11 10YR3/2 粗砂多量混じり細砂～中砂 | f. 基盤層 10YR5/3 砂混じり粘土 |
| | g. 基盤層 2.5Y5/3 砂質土 |

図3 調査区断面図 (S=1 : 100)



図4 調査区平面図 (S=1:100)

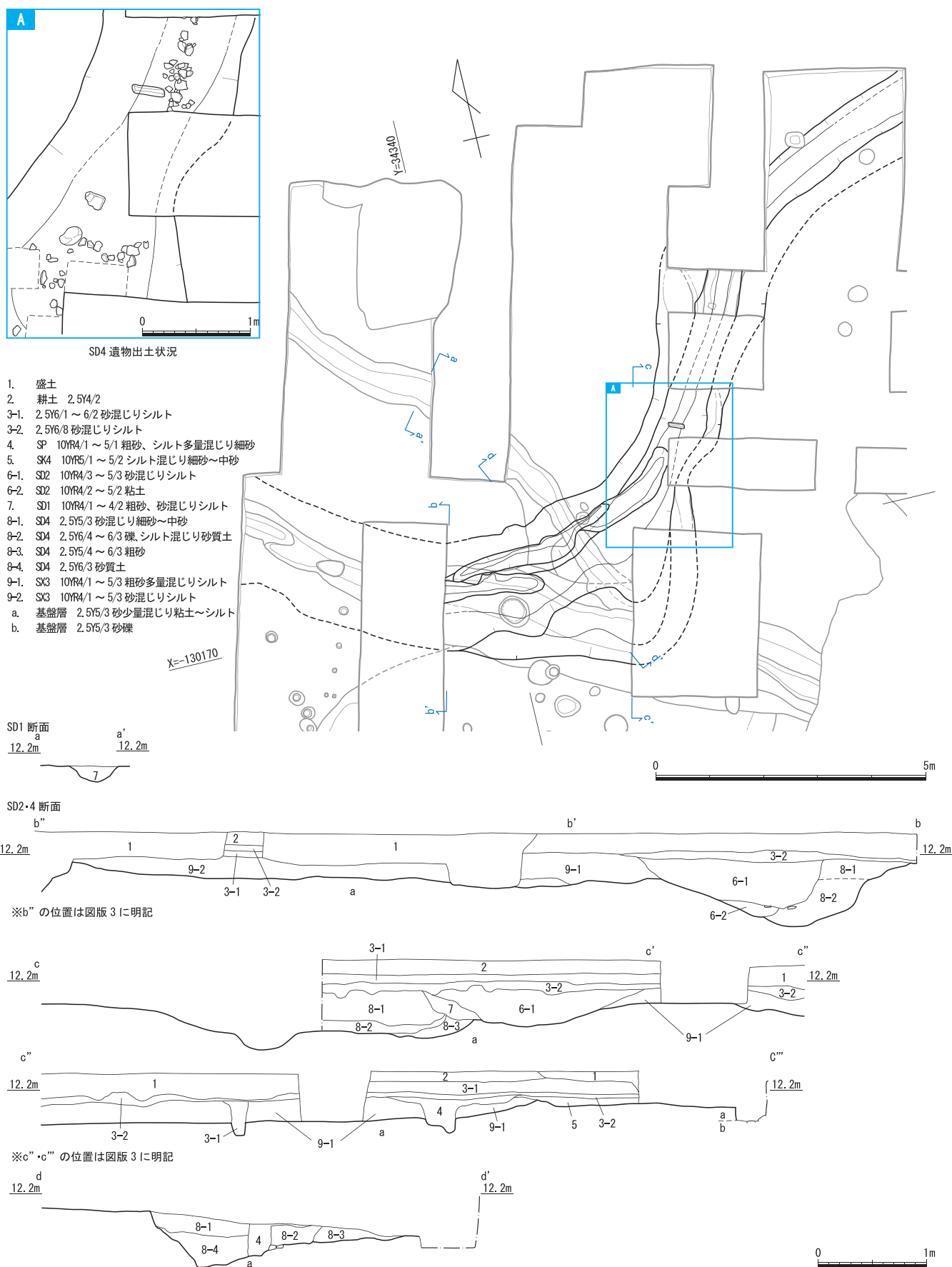
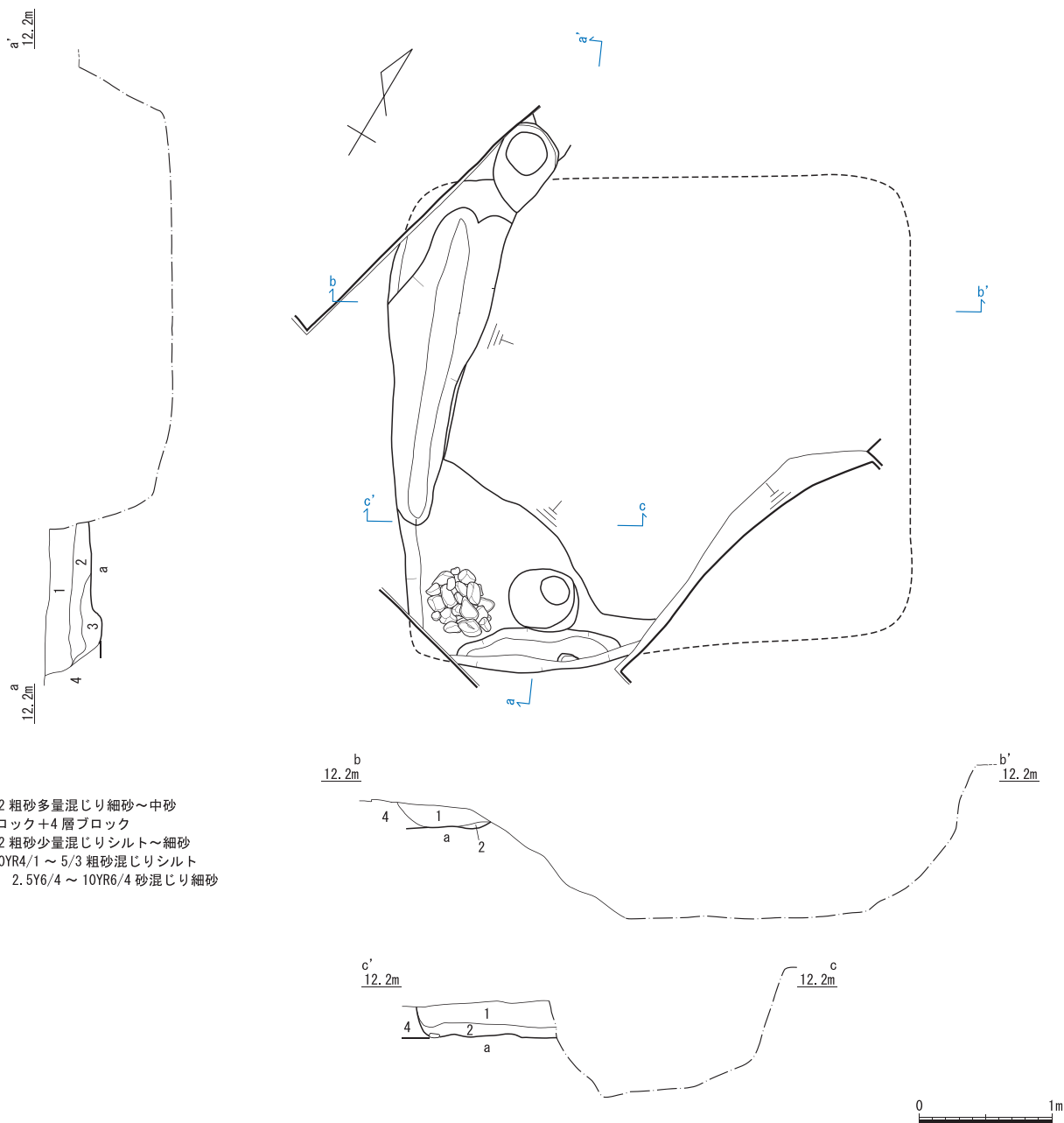


図5 SD4詳細図（平面図 S=1:100 遺物出土状況・断面図 S=1:50）



- 1. 10YR3/2 粗砂多量混じり細砂～中砂
- 2. 1層ブロック+4層ブロック
- 3. 10YR4/2 粗砂少量混じりシルト～細砂
- 4. SX3 10YR4/1～5/3 粗砂混じりシルト
- a. 基盤層 2.5Y6/4～10YR6/4 砂混じり細砂

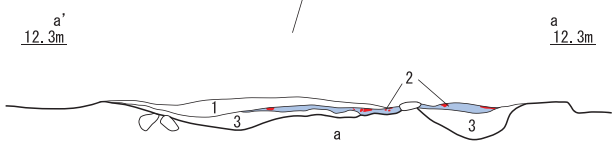


S11(北から)



a-a' 断面(南東から)

図6 S11詳細図 (S=1:50)



- 1. 10YR5/2 シルト混じり細砂～中砂
- 2. N3/ 砂混じりシルト 炭、焼土多く含む
- 3. 10YR5/1～4/1 砂質土
- a. 基盤層 2.5Y5/3 砂少量混じり粘土～シルト

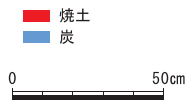
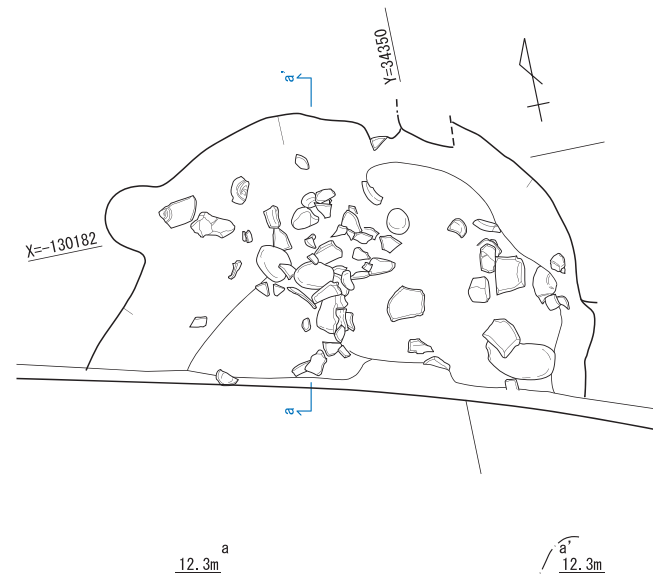


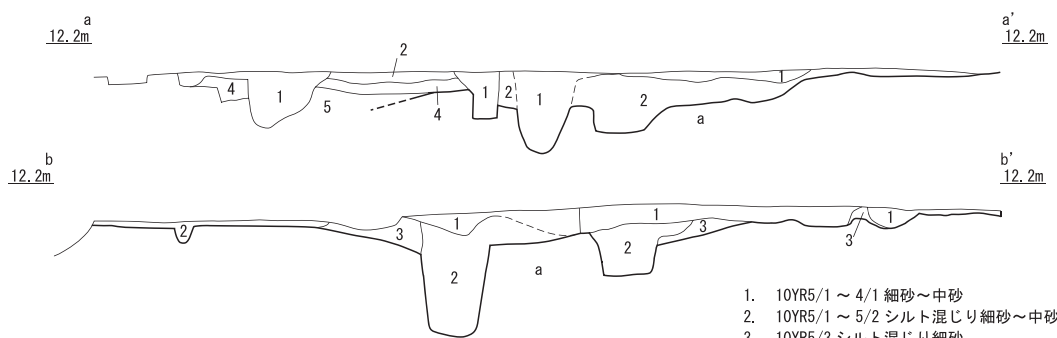
図7 SK1詳細図 (S=1:25)



- 1. 10YR4/1 粗砂、砂、シルト多量混じり細砂～中砂
- a. 基盤層 2.5Y5/3 砂少量混じり粘土～シルト



図8 SK2詳細図 (S=1:25)



- 1. 10YR5/1～4/1 細砂～中砂
- 2. 10YR5/1～5/2 シルト混じり細砂～中砂
- 3. 10YR5/3 シルト混じり細砂
- 4. 10YR6/2～5/2 シルト少量混じり細砂
- 5. SX3 10YR4/1～5/3 粗砂混じりシルト
- a. 基盤層 2.5Y5/3 砂少量混じり粘土～シルト

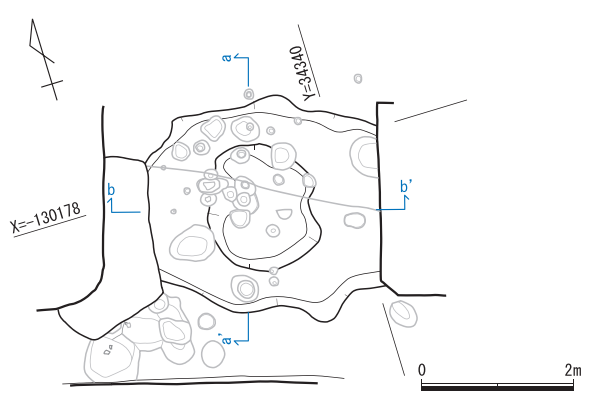


図9 SK4平面図 (S=1:100)・断面図 (S=1:25)

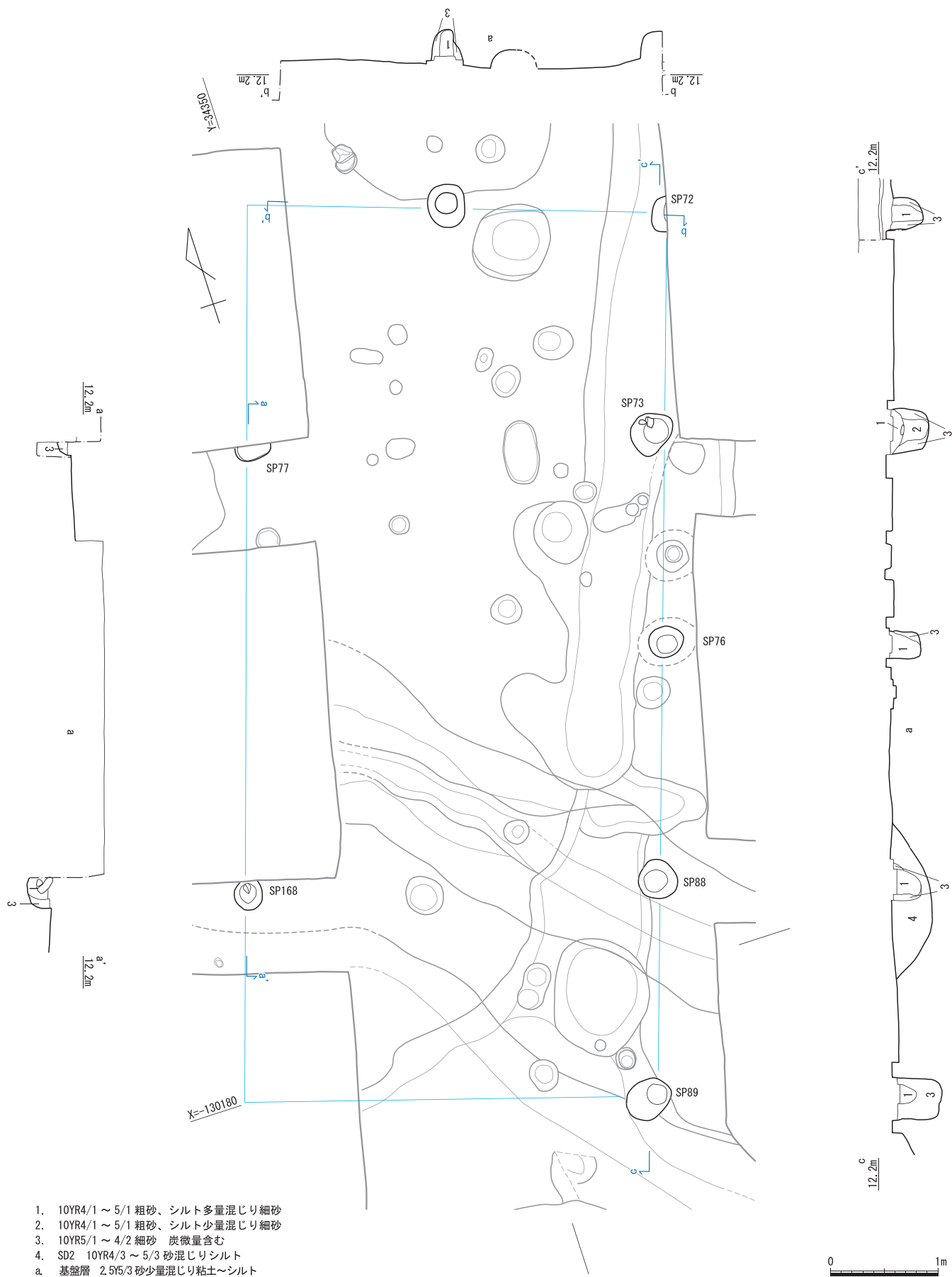
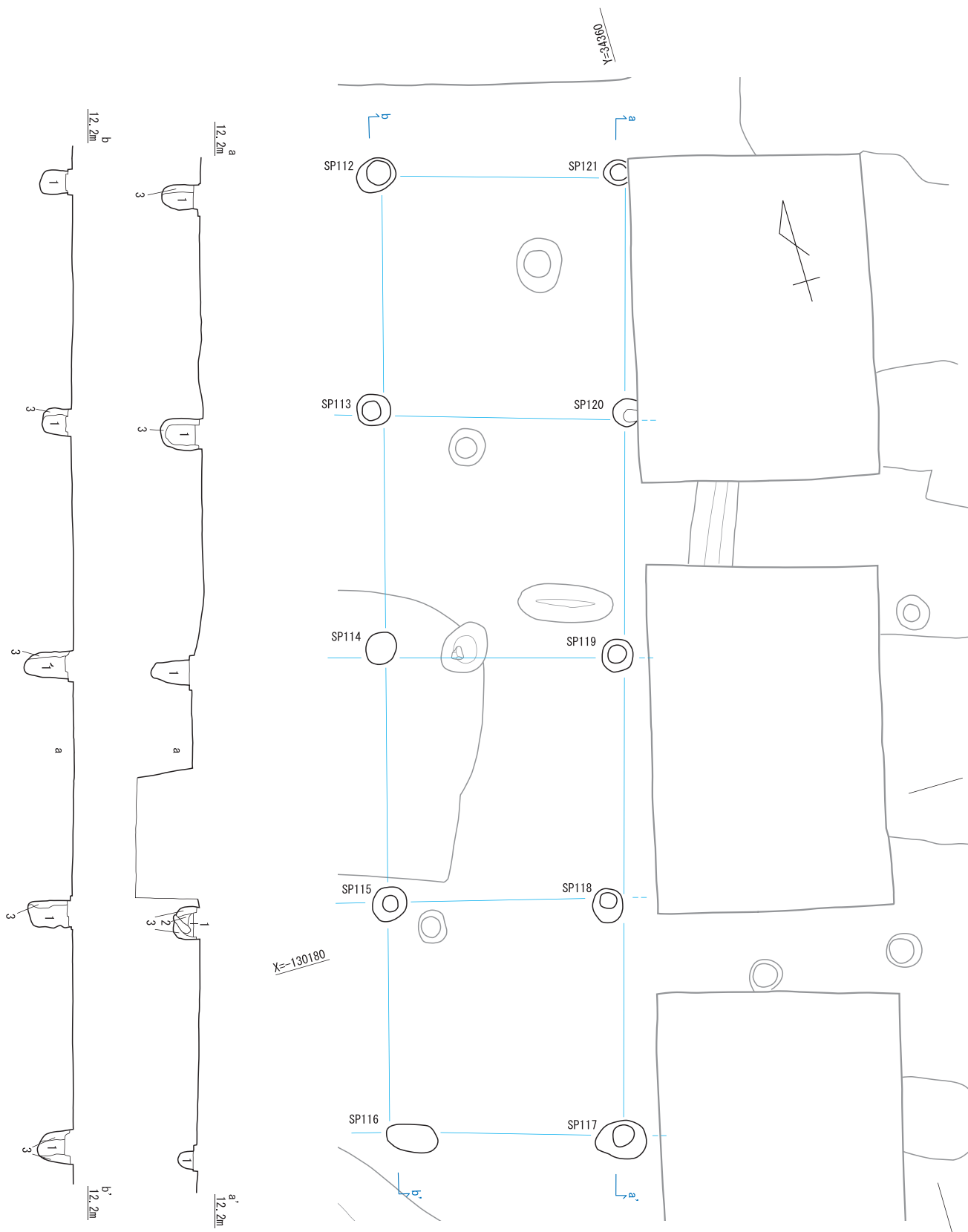
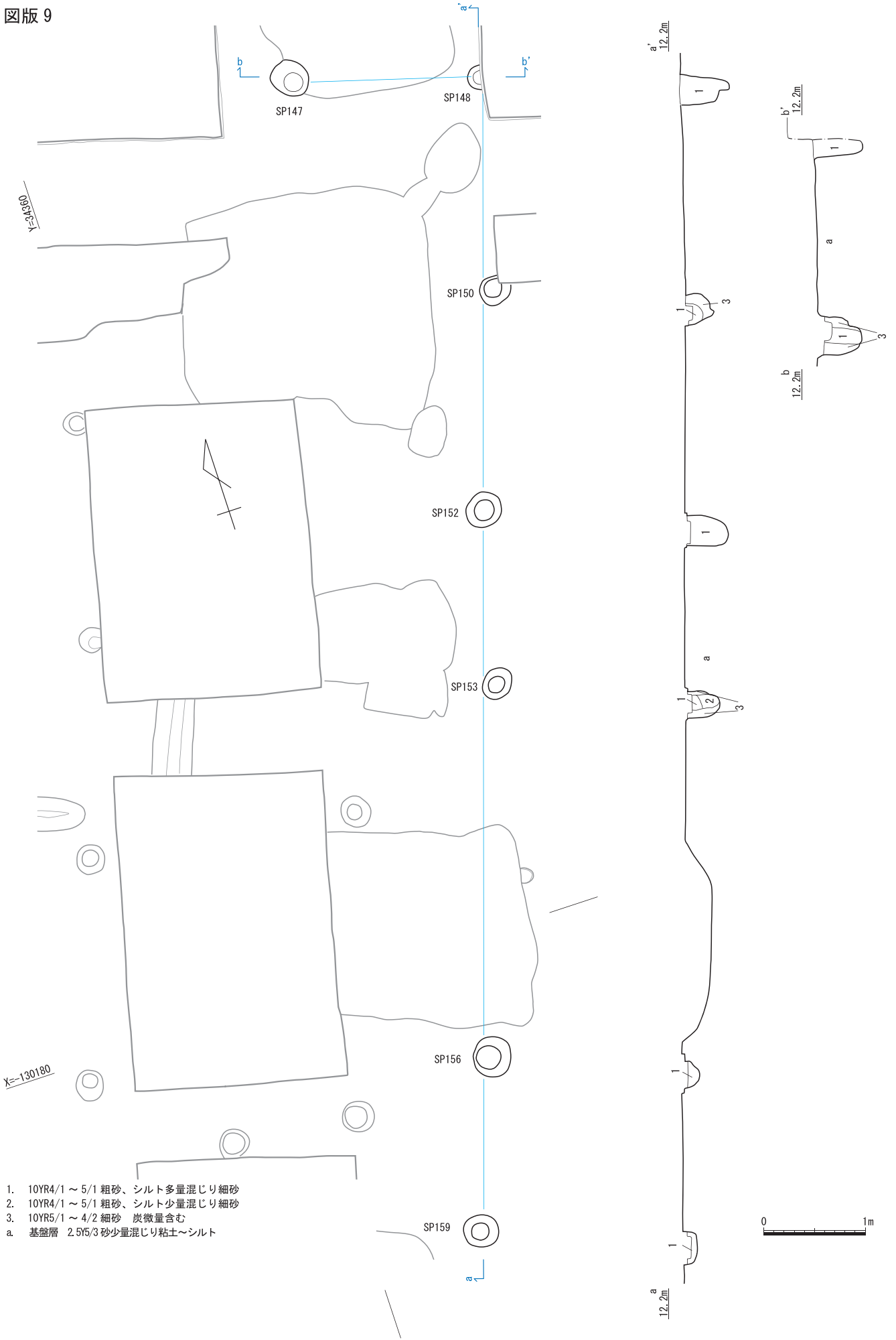


図10 SB1詳細図 (S=1 : 50)



- 1. 10YR4/1 ~ 5/1 粗砂、シルト多量混じり細砂
- 2. 10YR4/1 ~ 5/1 粗砂、シルト少量混じり細砂
- 3. 10YR5/1 ~ 4/2 細砂 炭微量含む
- a. 基盤層 2.5Y5/3 砂少量混じり粘土~シルト

図11 SB2詳細図 (S=1 : 50)



1. 10YR4/1 ~ 5/1 粗砂、シルト多量混じり細砂
2. 10YR4/1 ~ 5/1 粗砂、シルト少量混じり細砂
3. 10YR5/1 ~ 4/2 細砂 炭微量含む
- a. 基盤層 2.5Y5/3 砂少量混じり粘土~シルト

図12 SB3詳細図 (S=1 : 50)

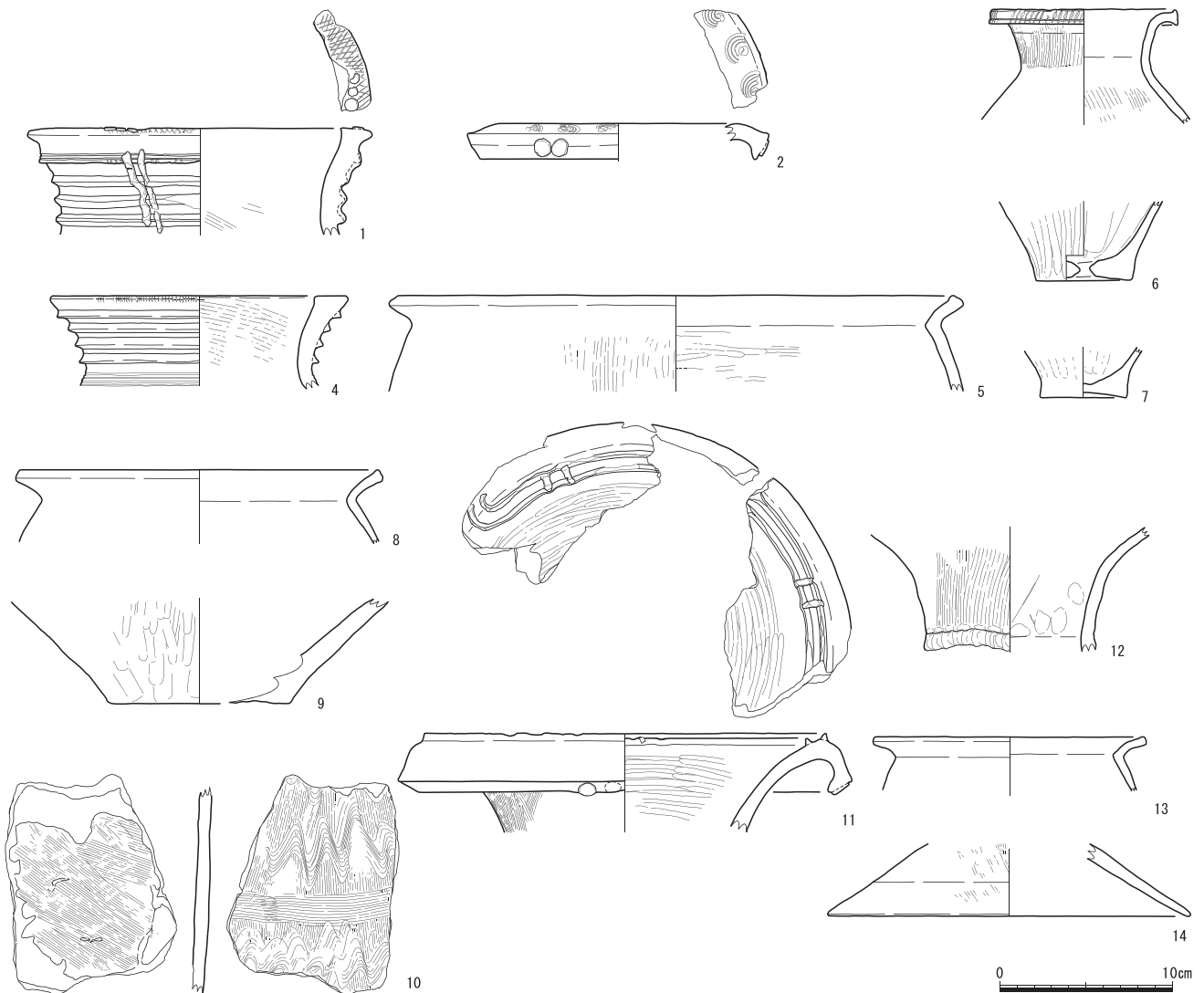


図13 出土遺物 実測図 (S=1:4)

番号	種別	器種	出土遺構	口径	底径	器高	色調(外)	色調(内)	焼成	胎土	残存状況	調整(外)	調整(内)	備考
1	弥生土器	直口壺	SX3-4	(16.6)	—	(6.25)	2.5Y8/2	10YR7/3	普通	φ2mm以下の砂粒を少量含む	口縁部1/9	斜格子文、円形浮文、貼付突帯(刻み目)、浮文	ナデ	
2	弥生土器	広口壺	SX3-2	(13.7) (最大径 17.4)	—	(2.0)	10YR7/2	10YR4/2	普通	φ1mm以下の砂粒を少量含む	口縁部1/12	ハケ 口縁部：扇形文、円形浮文	ナデ	
3	弥生土器	壺	SX3-3 No.1	(10.7)	—	(6.6)	7.5YR7/4	7.5YR7/4	軟	φ2mm以下の砂粒を少量含む	口縁部2/3	ハケ 口縁部：刻み目文	ハケ	
4	弥生土器	短頸壺	SD2-2	(16.9)	—	(5.4)	7.5YR6/4	7.5YR6/6	普通	φ5mm以下の砂粒を少量含む	口縁部1/8	貼付突帯 刻み目	ハケメ	
5	弥生土器	甕	SD2-2	(32.1)	—	(5.5)	10YR8/3	10YR7/3	普通	φ2mm以下の砂粒を少量含む	口縁部1/20	ナデ	ナデ	
6	弥生土器	甕	SD2-1 No.1	—	5.5	(4.6)	10YR6/4	10YR7/3	普通	φ2mm以下の砂粒をやや多く含む	底部完形	ナデ ミガキ	板ナデ	底部穿孔
7	弥生土器	甕	SD2-2 No.1	—	2.9	5.0	10YR6/4	10YR5/2	普通	φ2mm以下の砂粒をやや多く含む	底部完形	ナデ ミガキ	板ナデ	黒斑
8	弥生土器	甕	SD4-2	(20.6)	—	(4.2)	10YR4/2	10YR7/4	普通	φ1mm以下の砂粒を少量含む	口縁部1/20	ナデ	ナデ	
9	弥生土器	壺	SD4-2	—	(10.7)	(6.0)	10YR6/3	7.5YR7/4	普通	φ2mm以下の砂粒を少量含む	底部2/5	ナデ ミガキ	ナデ	
10	弥生土器	広口壺	SD4-3	—	—	—	7.5YR6/4	5YR6/6	普通	φ1mm以下の砂粒を少量含む	—	ハケ 口縁部：櫛描波状文・直線文	ハケ	
11	弥生土器	広口壺	SD4-1	(23.2)	—	(5.7)	7.5YR6/4	7.5YR7/4	普通	φ0.5mm以下の砂粒を少量含む	3/4	ハケ 口縁部：円形浮文	ミガキ 突帯	
12	弥生土器	広口壺	検出中	—	—	(7.15)	7.5YR6/4	5YR6/6	普通	φ2mm以下の砂粒を少量含む	頸部～底部 5/6	ハケ 頸部：貼付指頭圧痕突帯	ナデ 指頭圧痕	
13	土師器	甕	SI1内SP1	(15.4)	—	(3.1)	5YR7/6	5YR7/2	普通	φ2mm以下の砂粒を少量含む	口縁部1/8	不明	不明	
14	土師器	高杯	SI1	—	(20.8)	(4.2)	2.5Y7/2	2.5Y7/2	普通	φ1mm以下の砂粒を少量含む	脚部1/6	ナデ ハケ	ナデ	
15	土師器	皿	SP28 No.1	8.6	6.0	1.7	7.5YR7/4	7.5YR7/6	普通	φ2.5mm以下の砂粒を含む	完形	ロクロナデ 底部へら切り	ロクロナデ	スス付着
16	土師器	甕	SP41	—	—	(4.45)	10YR6/4	7.5YR6/4	軟	φ3mm以下の砂粒を含む	口縁部～頸部 1/10	ハケ	ナデ	外面スス付着
17	須恵器	碗	SP73	(16.3)	—	(5.0)	N6/	N6/	普通	φ2mm以下の砂粒を含む	口縁部1/7	ロクロナデ 底部へら切り	ロクロナデ	
18	瓦器	椀	SP165	(14)	—	(4.45)	N4/	N4/	軟	φ1mm以下の砂粒を含む	口縁部～ 1/20	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	

表1 出土遺物観察表



図14 出土遺物 実測図2 (S=1:4)

番号	種別	器種	出土遺構	口径	底径	器高	色調(外)	色調(内)	焼成	胎土	残存状況	調整(外)	調整(内)	備考
19	土師器	土錘	SP73	0.9	0.8	(2.05)	2.5Y8/4	—	普通	φ0.5mm以下の砂粒を多く含む	1/2	不明	—	
20	須恵器	土錘	検出中	0.95	0.95	4.55	N7/	—	普通	φ0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	完形	ナデ	—	
21	土師器	椀	SK1 No.2	21.6	—	(4.85)	7.5YR6/3	5YR7/3	軟	φ5mm以下の砂粒をわずかに含む	口縁部1/4	ロクロナデ 底部へら切り	ロクロナデ	
22	土師器	皿	SX1	8.1	5.0	1.1	7.5YR8/4	2.5Y7/2	普通	φ1mm以下の砂粒を含む	1/4	ロクロナデ 底部へら切り	ロクロナデ	
23	須恵器	鉢	SX1	23.5	—	(6.0)	7.5Y8/1	—	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	
24	土師器	皿	SK2	(9.4)	6.6	1.4	5YR6/6	7.5YR7/6	普通	φ0.5mm以下の砂粒をやや多く含む	1/2	ロクロナデ 底部へら切り	ロクロナデ	
25	土師器	皿	SK2 No.4	(9.5)	(7.5)	1.8	5YR6/3	5YR6/4	普通	φ2mm以下の砂粒を多く含む	1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	磨滅
26	土師器	皿	SK2 No.5	10.0	6.0	1.5	7.5YR7/6	10YR7/3	普通	φ1mm以下の砂粒をやや多く含む	1/4	ロクロナデ 底部へら切り	ロクロナデ	
27	須恵器	椀	SK2 No.1	(15.6)	(6.4)	5.7	N6/	N7/	普通	φ3mm以下の砂粒を含む	口縁部～ 1/2	ロクロナデ 底部糸切り	ロクロナデ	
28	須恵器	椀	SK2	—	6.4	1.9	2.5Y7/2	2.5Y7/2	普通	φ2mm以下の砂粒を含む	口縁部1/10	ロクロナデ	ロクロナデ	重ね焼き痕跡あり
29	須恵器	瓶	SK2 No.3	—	(11.9)	(9.7)	N7/	N7/	普通	φ1mm以下の砂粒をやや多く含む	底部1/4	ケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	
30	土師器	皿	SK2 下層	(12.9)	(8.2)	3.2	10YR5/2	10YR5/1	普通	φ0.5mm以下の砂粒を含む	1/5	ロクロナデ	ロクロナデ	
31	土師器	壺	SK2 下層	(27.9)	—	(3.8)	10YR4/2	5YR6/6	普通	φ2.5mm以下の砂粒を含む	口縁部1/5	ロクロナデ	ロクロナデ	
32	須恵器	瓶	SK2No.11-1	(12.3)	—	(6.8)	N7/	N7/	普通	φ1mm以下の砂粒をやや多く含む	口縁部～ 1/20	ロクロナデ	ロクロナデ	
33	須恵器	瓶	SK2No.11-1	—	(14.0)	(10.1)	N5/	N7/	普通	φ1mm以下の砂粒をやや多く含む	底部～体部 下半1/6	ケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	
34	土師器	皿	SK2 No.7	(14.2)	(9.1)	2.6	5YR6/3	2.5Y6/6	普通	φ1mm以下の砂粒を多く含む	底部1/4	ロクロナデ 底部へら切り	ロクロナデ	
35	土師器	皿	SK2 No.10-1	(13.8)	(8.2)	2.9	2.5Y8/2	10YR5/2	普通	φ0.5mm以下の砂粒を含む	1/5	ロクロナデ 底部へら切り	ロクロナデ	
36	石製品	砥石	SK2 No.9	7.65(最大幅)	3.0(最大厚)	11.5(最大長)	10YR6/1	5Y6/2	—	—	—	—	—	
37	土師器	壺	SK2 No.13	(21.6)	—	(5.4)	7.5YR5/3	7.5YR5/4	普通	φ5mm以下の砂粒をやや多く含む	底部1/3	ロクロナデ タタキ	ロクロナデ	

表2 出土遺物観察表



写真 1 調査区全景(南東から)



写真2 SD1, 2, 4(北から)



写真3 SD4遺物出土状況(北から)



写真4 SD4 b-b' 断面(東から)



写真5 SD4 c-c' 断面付近(北西から)



写真6 SD4 d-d' 断面(南西から)



写真7 SB1、2、3(北から)



写真8 SK1(北から)



写真9 SK4(南から)



写真10 SK2(南から)



写真11 SK2断面(西から)



写真12 出土遺物 1



写真13 出土遺物 2 ※数字は遺物実測図番号に対応する

報告書抄録

ふりがな	いちのごういせきだい17じはつつちょうさほうこくしょ							
書名	市之郷遺跡第17次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第60集							
編著者名	小柴 治子							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地 1 TEL(079)252-3950							
発行年月日	平成30年(2018年)3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
いちのごういせき 市之郷遺跡	兵庫県姫路市 市之郷町三丁目49番2	28201	020462	34° 49' 33"	134° 42' 31"	2017.2.1 ~ 2017.4.17	406 m ²	開発行為
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		遺跡調査番号		
市之郷遺跡	集落跡	弥生時代	溝	弥生土器		20160486		
		古墳時代	竪穴式建物跡	須恵器、土師器				
		中世	土坑、掘立柱建物跡、柱穴	須恵器、土師器				

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第60集
市之郷遺跡第17次発掘調査報告書

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地 1
発 行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目 1 番地
発 行 日 平成30年(2018年)3月31日
印刷・製本 内海印刷株式会社
〒670-0808 兵庫県姫路市白国 5-8-4

